

Title	シラム発見の希臘羅馬型ランプ
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.84(450)- 84(450)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0084">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0084</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## シラム發見の希臘羅馬型ランプ

シラムのボン・チュクと云ふ所で、セデス氏が一九二七年發見した希臘羅馬型ランプに就ては我國に於ては郡司喜一氏が昭和九年十月外務省から出版せられた「十七世紀に於ける日暹關係」の四九八頁―五〇七頁に紹介せられてをる以外あまり知られてゐない様なので舊聞であるが此處に一寸述べてみる。ボン・チュクと云ふ所はラトブリ州に於いてメクロン河の右岸に臨む小村である。最初の發見はシラムの新聞に報導され、當時シラムにゐたセデス氏は早速檢分に出張し、その出土品として希臘羅馬型ランプとアマラーワテヒー派の一佛像とを手にいれて歸つた。次いで再度出張してその出土地及びその附近の發掘をなし、若干の建築址と佛像とを發見し、此遺址が大體、カンボヂアやタイの影響なく、それに反し印度グプタの影響の濃いものであり、西紀六世紀を下らないものであることを確めた。殊にアマラーワテヒー派の佛像はガンダトラの影響深きもので西紀二世紀を下らずその印度起原は争はれず、ランプに至つては全く西方出來で蓋はシレーンの顔を浮彫にし、柄には二世の海豚に挟まれた棕櫚枝模様をつけて古への大秦文化の東漸をまざくと示す好個の資料である。ローマン・オリメントと支那との關係は例の安敦王の遺使云々の後漢書の記事もあり、よく世人に知られた事實であるがローマンが如何なる通路で極東に來たかに就ては今後かういふ發見によつてなほ精細に研究する必要があらう。郡司氏の様に此發見を羅越國のシラム比定に有利に導かうとする議論には首肯しかねるが古代交通路の一がマレイ半島の南端を迂回せず半島の頸部から直接印度方面に出たことは疑ひをいれない。ラオスでコラニ女史の發見されたローマン・グラスと云ひ、西方文化の海上からの影響を示す有形的徵證の次第に發見されてをることは悦ぶべき事柄である(松本信廣)。